不屈
滋賀県版No. 347
2022・12・15

治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟
〒113-0034
東京都文京区湯島2-4-4
平和と労働センター・全労連会館

発行
滋賀県本部
大津市竜が丘11-22-316
☎077-521-0884
柚口 延

350人県同盟建設をめざして 県・支部幹部先頭に力尽くそう

9月の県本部幹事会が提唱した「2022年内に350人の県同盟建設」の取り組み最終月の12月を迎えました。この間、若干の会員拡大がすすみましたが、350人はまだ距離があります。「県本部3役、幹事が年内に1人以上の会員増やす」実践、「支部の幹部が1人の会員を増やす」取り組みが十分でない結果です。

ここで改めて「会員拡大の意義」を考えてみようではありませんか。「特定秘密保護法、共謀罪法、戦争法など」の「名前を変え、装いを変えた治安維持法体制の復活」をたくらむ支配階級の策動を打ち砕き、民主主義、憲法9条を守るために、同盟建設が重要と訴えてきましたが、この意義は少しも変っていません。

さらに言うなら同盟が、治安維持法犠牲者の名誉回復だけでなく、「平和と人権の日本と世界」を実現するために運動している組織であり、同盟を大きくすることは、未来に向かって「平和と人権を基調とする日本国憲法を守り、生かす日本をつくる力」を広げることでもあります。

治安維持法国賠同盟の存在意義に確信をもって、この12月、会員拡大を推し進め、県同盟創立35周年の今年を前進の年にしようではありませんか。

重ねて県・支部役員のみなさん、会員のみなさんに会員拡大の取り組みを訴えるものです。

12月1日現在

会員　316人
（目標350人）
個人署名
807筆
（目標5,000筆）
団体署名17筆
（目標150筆）

国民の暮らし破壊する大軍拡許さない 12・8宣伝

12月8日、JR石山駅で大津支部は、大津平和委員会、新婦人大津支部、大津母親連絡会と合同で、2022不戦のつどいの街頭宣伝を行いました。11人の参加でした。今年は太平洋戦争開始から81年目。歴代政権が「違憲」としてきた「敵基地攻撃能力の保有」（反撃能力）に与党が合意しました。戦後の防衛政策の転換を意味します。軍拡に突き進む岸田政権の危険性を指摘する訴えに耳を傾ける人、立ち止まる高校生、カンパを渡す人がいました。

JR石山駅デッキ

訂正

不屈11月号の2頁の「甲賀市の映画の取組」は、小西喜代次さんではなく、湊愛子さんの投稿でした。訂正し、お詫びします。

映画「わが青春つきるとも」を鑑賞して

県本部副会長　奥村　信夫（湖南市）

10月22日に湖南市の「菩提寺コミニティーセンター」で開催された「わが青春つきるとも・映画会」に参加しました。私は映画を観る前に、パンフレットを見て、伊藤千代子の事を少し勉強しました。伊藤千代子は1905（明治38年）に生まれた事を知り、最初に、私の母親の事が頭に浮かびました。私の母親は1917年（大正6年）生まれで、12歳年下になります。時代背景から若くして亡くなった母の事を、こんなに厳しい時代に生きたんだと思い出しました。映画の中で、一番記憶に残ったのは、路上で特高警察に追われて走る伊藤千代子、その前方から駆け寄ってくる特高警察に取り押さえられるシーンです。国民の主権を求め、労働者の権利を求めて闘う活動家を拘束して拷問にかける。それでも不屈で闘った伊藤千代子をはじめ、多くの活動家に感謝の気持ちでいっぱいです。特に、信じていた夫の裏切りにも耐えて闘った伊藤千代子に感動しました。

ただ、この映画で、労働者が団結して立ち上がった、その時の喜び、確信等々が描かれたらもっと良かったのでわないかと思います。

久しぶりに、大変良い映画を観ることができました。ありがとうございます

菩提寺コニュニティーセンター

自民党は「政治と宗教の関係」において、果たして政権を担える政党なのか！

―自民党と統一教会の歴史的・構造的癒着問題の本質―（上）

大津支部長　松尾　隆司

二〇二二年七月八日、安倍元首相が選挙遊説中、銃撃殺害される事件が起きた。後日、山上容疑者の取り調べの中で、「統一教会への恨みから、統一教会を支援する安倍元首相をねらった」ことが明らかになった。

それを契機に、連日、自民党政権と統一教会の癒着の実態、統一教会への献金地獄の実態が、被害者弁護団、鈴木エイト氏、有田芳生氏らによって、連日のように報道されている。

一二月六日現在、臨時国会で宗教被害者救済新法が審議されている。被害者の救済に真に実行性のある法案が求められるが、予断を許さない。

しかし「救済法」ができればそれで終わりというわけにはいかない。この問題の最も重要なことは、時の権力、自民党政権が統一教会に便宜を図ってきたのではないか、という根本的問題がある。憲法21条の政教分離の原則に違反してきたのではないか、という政治と宗教のかかわりについての根本的な問題である。

統一協会と自民党の癒着の歴史は実に根深いものがある。

「統一協会・自民党関係史」中野昌宏（岩波書店・『世界』二〇二二・九）から、主なかかわりの部分を以下に抜き出す。

源流（五〇年代）

一九五四年　文鮮明、世界基督教統一心霊協会（略称＝統一協会）

創立
一九五五年　自民党結成
設立（六〇年代）
一九六四年　日本統一教会設立、宗教法人として設立（東京都によって認証）
一九六八年　国際勝共連合教団の政治部門）、韓日で設立
発足当初から統一協会と国際勝共連合は一体であり、かつ岸信介、笹川良一、児玉誉士夫らと「反共」路線で完全に一致協力してきた。
黎明（七〇年代）
一九七〇年　七三年　岸信介統一協会本部で講演
一九七八年　福田赳夫首相、自民党と勝共連合の協力関係を初めて認める
霊感商法と合同結婚式（八〇年代～九〇年代）
一九八〇年　高村正彦弁護士、教団側代理人として信者の脱洗脳「強制入院」を阻止
一九八二年　岸信介が合同結婚式で祝辞
一九八四年　岸信介、収監中の文鮮明の釈放嘆願書をレーガン大統領に送る
一九九二年　金丸信と文鮮明会談、「北東アジアの平和を考える国会議員の会」との懇談を理由に入国を特別許可。中曽根康弘が合同結婚式で祝辞
祝電や講演（二〇〇〇年代以降）
二〇〇五年　UPF創設。「天宙平和連合創設記念大会」に安倍晋三が祝電
二〇一五年　名称変更に成功（略称＝家庭連合）
二〇二一年　UPFに安倍晋三、トランプと共にビデオメッセージで参加
この中には、政府与党が政治的機能・権力を用いて、特定政党・統一教会を厚遇するという、憲法20条違反、政教分離原則の違反が問われる問題まで含まれている。
（＊傍線は筆者）

（次号に続く）

卒寿の思い『少年時代は、戦争だった』④

甲賀市　吉村　克之

空の神兵

太平洋戦争（当時の呼称で「大東亜戦争」）は、真珠湾への奇襲で幕を開けます。ここでは、機雷を装備した5隻の水雷艇が9人の乗組員もろともに米艦に体当たり・自爆するという、非人間的でしかも兵器浪費の戦術が採られました。のちの「特攻隊」のさきがけです。

開戦半年ほどは、フィリピン、インドシナ、マレー、インドネシアと破竹の勢いで前進して、国内を湧かせました。中でも華々しいのはセレベス島を襲撃した新戦術「落下傘部隊」でした。当時映画はモノクロでしたが、ニュース映画で、空一杯に白い落下傘が一斉に開くシーンでは、期せずして満場の拍手が起こりました。また、この作戦を歌った『空の神兵』（梅木三郎作詞、高木東六作曲）は、「♪1　藍より蒼き大空に　たちまち開く百千の真白きバラの花模様　見よ落下傘空に降り　見よ落下傘空を征く」と生臭い戦争を直接感じさせない歌詞（2，3番には少しきな臭さが出ますが）に、以前の軍歌や軍国歌謡に見られた文語調の歌詞に重々しい旋律とリズムではなく、明るい旋律に弾んだリズムで感性に訴える力を持った、「さすが東六」と言いたくなるような作曲でした。

国民の心に訴える芸術媒体として、①1928年にラジオの全国放送開始、②35年に映画のトーキー（音声付き）化、③40年にレコードの電気吹込が始まる、などめざましい発展が見られ、芸術家の統制と相まって国民の思想統一が進められます。

（8頁最下段に続く）

明治黎明期の「滋賀新聞」「琵琶湖新聞」から短命に終わった平成期の「みんなの滋賀新聞」まで

県本部幹事　木越　暁

新企画として「湖国の新聞事情」のテーマで時代ごとの「メディア」について書いていくことになりました。明治維新後、近代国家を目指す黎明期のころから。当時、湖国には彦根、膳所など9藩があったが、明治5年に「滋賀県」が誕生。文明開化の一翼ともなった新聞発行は、そのころから全国に広がり、毎日新聞の前身となる「東京日日新聞」と発行期をほぼ同じくして湖国でも「滋賀新聞」、翌年には「琵琶湖新聞」が発行されました。その後、湖国地元紙は休刊と廃刊、復刊などを繰り返しながら、今は「みんなの滋賀新聞」が廃刊のまま、メディア過度期に陥っています。その背景には官権の援助と、逆に弾圧の波瀾がありました。

湖国の新聞事情

明治、大正、昭和
平成、令和

滋賀県で、なぜ地元新聞が育たないのか

―明治編㊤―

瓦版から新聞へ まず新聞発祥の事情より

日本でさまざまな情報が詰まったメディア（新聞）が登場するのは明治維新以降で、それまで江戸初期から1枚刷りの瓦版が読売とも呼ばれ、街道筋などで売られていました。徳川幕府が何度も出版統制令を出し、時事的な出来事についての報道を一切禁じていたためです。江戸初期には神仏画の大津絵、江戸後期には中国の瀟湘八景にになぞらえた近江八景（江戸初期選定）の瓦版絵図も大流行しました。長浜曳山祭の子供歌舞伎を番付にした長浜かわら版（写真右）も平成末期に発見。1853年のペリー浦賀来航も関東の瓦版で広く伝わりました。

子供狂言の長浜かわら版

それが明治維新後、出来事の報道が解禁となって文明開花の一翼を担う新聞の登場となりました。

「新聞」の語は西洋の新聞「news」を訳した「新しく聞き知った出来事」からきています。

明治5年に創刊の東京日日新聞
（日刊・全国紙の第1号）

日本で初めての日刊新聞は「横浜毎日新聞」

明治政府による近代化政策で、各地に新聞が誕生。藩政改革が済む明治3年になって日本で最初に出来た日刊地方紙は明治3年2月創刊の「横浜毎日新聞」でした。横浜の商人が出資して作った新聞です。洋紙を使った1枚の活版刷りで、1部の値段は104文（今の1250円くらい）でした。

日刊全国紙としての最初としては「東京日日新聞」（のちの毎日新聞）で、創刊は明治5年2月21日。1号は和紙木版2色刷り、12号から活版両面刷りで1部140文（今の1680円くらい）。漢文調で政論を基調とし、知識人向けで「大新聞」と呼ばれました。

大手紙ではその後、読売新聞が明治7年、朝日新聞が明治12年に創刊されています。

次号は新聞発行禁止第1号となった「江湖新聞」から続く。

湖国の新聞事情①「明治編」㊤

滋賀県で最初に創刊された「滋賀新聞」

滋賀県で初めて創刊された新聞は「滋賀新聞」（明治5年10月1日発行）。その創刊号＝写真左・滋賀県立図書館蔵＝を見ると発行は月3回、1部定価2銭（200文）。そのころ男性1人の日当が6銭だったので最初はかなり高いものでした。体裁四六判（B6判くらい）。和紙木版刷りで二つ折り袋とじにした7枚つづりの冊子仕立て。しばらくして部数が2千部くらいに増えたころ月10回の発行で一部1銭に値下げしています。発行人は薩埵文造ほか1人。編集人は山岡景命（旧膳所藩士）と県庁へ届けています。

大津大門町に本社、彦根、近江八幡に通信部や取次所を置いて取材にあたっていましたが、京都や大阪などの新聞記事を平気で載せていたとも伝えられています。

薩埵文造らが県庁へ出した開業願いの日付が明治6年1月になっており、届け出前から発行。明治7年12月の紙面では発兌（発行）規則として「天地万有の事蹟を以て上下の情態を洞写し姦悪（悪者）をくじかん」と高らかに宣言していました。しかし明治14年2月に休刊、3月に「淡海日報」、その後「江越日報」と改題したが明治15年12月28日に廃刊となりました。「民権新聞への圧迫もあり経営不振で廃刊」とあります。

滋賀県で最初に創刊された、この滋賀新聞は、このあと明治40年3月創刊の「滋賀新聞」とは別の滋賀新聞です。

明治6年3月創刊の「琵琶湖新聞」以降は次号に続きます。

● 滋賀県紙・地方新聞史関連年表

西暦	和暦	出来事
1868年	明治元年1月16日	大津湊町の旧大津代官石原役邸に大津裁判所を開設
〃	〃　4月28日	大津県庁を旧裁判所に置く　のち寺内町に移転
〃	〃　6月8日	許可を受けぬ新聞の発行禁止（無官許発行禁止令布告） 関東の「江湖新聞」新政府批判で発行禁止（言論弾圧第1号）
〃	〃　9月8日	「明治」と改元　天皇1世1代制となる
1869年	〃 2年1月	大津県庁を大津別所の円満寺に移す
〃	〃　1月27日	官許出版の手続き（細則）を布告
〃	〃　2月8日	新聞紙印行条例を制定(新聞発行を正式に認めた最初の法令) 新聞雑誌の毎号の検印が義務付けされる（検閲制の始まり）
1870年	〃 3年2月27日	日本で最初の日刊・地方紙「横浜毎日新聞」創刊
1871年	〃 4年7月14日	廃藩置県、近江の各藩も統合へ
〃	〃　12月5日	新聞紙の定額郵送が始まる
1872年	〃 5年1月～2月	大津県が滋賀県に、長浜県が犬上県に、9月に滋賀県となる
〃	〃　2月21日	日刊・全国紙の「東京日日新聞」創刊（のち毎日新聞）
〃	〃　10月1日	滋賀県で最初の「滋賀新聞」創刊（月3回発行）
〃	〃　11月9日	「琵琶湖新聞」の発行願書・規則書県庁に提出
1973年	〃　6年1月	「滋賀新聞」会社開業願書を県に提出
〃	〃　3月1日	「琵琶湖新聞」創刊（月3回）
〃	〃　12月	明治元年～6年までの間に全国で77の新聞・雑誌が創刊された

治安維持法と滋賀県⑧

県本部副会長　西田　清

「沢勘」と親しまれ、尊敬されて労働組合運動階級的立場をつらぬいた彦根の沢勘四郎

革命運動や労働組合運動で大衆から親しまれ、尊敬された人はたとえば「谷善」（谷口善太郎）のように略称で呼ばれる。わが滋賀県彦根の沢勘四郎もそういう一人で、「沢勘」と愛称された。『滋賀県労働運動年表』、『滋賀社会労働運動史』に戦前、戦後を通じてしばしばその名が出てくる。それらの「事件」を列挙してみよう。

1930年6月25日　近江帆布争議団（賃下げ反対などで）ストライキにはいる。同日、午後争議団幹部、沢勘四郎、中尾伍郎、又木友蔵、山口松次郎などを検束

6月26日　近江帆布争議団幹部を逮捕（中尾伍一郎、沢勘四郎など）

この近江帆布の争議は戦前滋賀の最大の闘争の一つであった。この闘争の敗北後も、沢勘は地道な闘いを続けた。

8月15日　滋賀県繊維化学労働組合、労農党京都支部連合会の応援を得て、東洋レーヨン前でビラ撒き、検束（高野茂樹、沢勘四郎など）

1931年5月1日　（彦根地区メーデー）　沢勘四郎司会、尾末公園に参集、デモ行進、尾末公園に帰り解散

1932年5月1日　（彦根地区メーデー）　滋賀県繊維労働組合が中心となり総指揮・沢勘四郎、尾末公園に参集、デモ行進松原埋立地で解散

8月16日　湖東紡績工場で湖友会を組織し解雇されたのでビラを配布。出版法違反で沢勘四郎は罰金五〇円の判決を受けた。

12月5日　（滋賀金属労働組合〔30人〕が賃金3割値上げなどを要求してストに入る）滋賀金属労働組合に未加入の従業員もストライキに入る（17工場、250人）。争議団は資金づくりに行商隊を出す。争議団幹部（沢勘四郎、山本巳之助、中村金一、江頭安市など）検束

1933年5月1日　彦根、能登川の労働者を中心に彦根尾末公園に集合、デモ行進後彦根港湾埋立地で解散（指揮者　沢勘四郎、江頭安市）

この年、大津では社会民主主義者が「愛国労働祭」なるものを企画し、結局は禁止されてしまうのだが、彦根では沢勘たちが「首切賃金値下労働強化絶対反対」、「七時間労働制にして失業者を使用せよ」、「団結権、罷業権デモの自由も与えろ」などのスローガンを掲げてデモ行進をした。

沢勘たちは最後まで階級性を貫いたのである。

この後1934年に、沢勘は「労働運動が事実上できなくな」って、運動から「足を洗った」（沢幸夫人の回想＝『滋賀民報』1984年1月1日付）。

そののち、沢勘は彦根市の銀座に「マルビシ百貨店」を開業したようで、戦後の1948年2月、沢勘は当時開けていなかったマルビシの3階を、日本共産党湖北地区党会議の会場に提供してくれた。私もそこに参加したから、間違いない事実だ。

沢勘には戦後、日本共産党に加わる気持ちがあったようだが、1947年の衆議院議員選挙候補に自分が選ばれず、石川県から来た党員が立候補したことが不満で、党から離れたと聞いた。

その頃の滋賀の共産党の状況は知らないが、1948年の滋賀の共産党は労働運動、農民運動を指導し、勢いがあって、1949年1月の総選挙で全電工日電大津分会の江崎一治さんが衆議院議員に当選した。そこには戦前の沢勘など諸先達の苦闘も反映されていたと思う。

滋賀と朝鮮 81
彦根市城東小学校④

河 かおる

前回の原稿を書いた後、是金昭三さんにお目にかかって直接お話を伺うことができました。また、彦根市立図書館で京都新聞や彦根市議会の会議録を閲覧して、『新修彦根市史4 現代』（2015年）に書かれていた「緑化園」の顛末も少しわかったので、タイトルを再び城東小学校に戻して、今回は城東小学校のことをもう少し書きます。

まず、『新修彦根市史』で言及されていた京都新聞の1960年3月25日の記事は、「“帰国記念”をことわる　彦根市城東校　朝連と市教委が対立」という大きな見出しの記事でした。全文引用します。

日朝親善と報恩のしるしに母校への記念の緑化園をつくりたいと申し入れた朝鮮総連湖北支部（宋水用支部長）の好意が、学校を管理する市教委に断わられ、成り行きが注目されている。帰郷者たちは「民族の差別だ」と叫び、市教委は「市のメンツがある」と主張、文字通り“泥沼合戦”となっている。

彦根市城東校（村瀬仁市校長）に“長年お世話になったお礼”として、同支部の代表李東さん（三七）らが、昨年末、学校の前庭に緑化園をつくって贈りたいと申し入れたのが問題のおこり。学校では大喜びで、すでに、できていた庭園計画によって、二月初めから工事にとりかかることになった。学校を管理する市教委も「文句なく賛成してくれる」と思って一月末、市教委へ文書で了解を求めたところ“チョット待った”が出たわけ。同校は市内の“モデル学園”その校門付近に、朝鮮人の帰還記念事業は許せぬと反対して許可しなかった。学校では県内の各校や、他府県でも記念事業の明るい話題で持ち切りだのに、どうして許可ができぬと抗議したが、返事はないまま、さる十九日の彦根市議会でも督永丈夫議員が「どうして許可ができぬ」と金川教育長を追及してから、市議や婦人、青年団の間でも非難の声が高まっている。

同朝連の計画では同校門前の約五百平方㍍の中央部に噴水づきの用水池を設け、周囲は針葉樹や桜でいろどる。芝生を植えて平和な学園のシンボルにしたいという構想で、予算五十万円の準備もおわり「着工の日」を待っていたのだという。二十八日には同校朝鮮教室の四年生徐正美さん（一〇）が第十五次朝鮮帰還船で帰るので、同支部としても、どうしても記念事業をやりたいという意向を持っている。

このため、二十九日同支部の一行が井伊市長と会って、解決策をみい出すための話し合いをするという。

李さんの話　なんとしても実現させたい。そして第二の母国に一つの思い出を残して私たちは帰りたい。

金川教育長の話　朝鮮人に記念事業として緑化園をつくってもらうことは市のメンツ、ひいては市政の貧困さを暴露するようなものだ。

そこで彦根市議会の議事録は無いかと探してみたところ、彦根市立図書館で閲覧できました。1960年3月19日の彦根市議会定例会会議録によると、督永丈夫市議（社会党）が、議案外の問題だがと断りながら質問を始めます。前年末から帰国する朝鮮人が増加しているが、その帰国する朝鮮人が、城東小こそ「朝鮮民族が感謝に値いする学校なりと考え、同小学校の玄関先に約五十万円の造園を作ってこれを永久に彦根市に残そうとした」と。それを受けて学校の側でも「これほど喜ばしいことはないとして非常に歓迎」した

にもかかわらず、「何故この朝鮮と彦根を結ぶ温い友情を拒絶されたか」を市長に問うています。

ところが、市長は答弁せず、金川健一教育長が「私のほうの所管で教育委員会の方でお断りした」ので自分が答えるとして答弁に立ちます。「せっかくのご好意を断りましただけにまことに心苦しい」と一応最初に弁明した上で、大津市など他地域のように、記念植樹や時計ぐらいなら「喜んでお受け」するが、庭園となると「永久の問題」なので話が違うという論理を展開します。そして「教育委員会のまことに無能であるということの代表として残りましてはと思いまして」、「彦根市にも金がなかったのだなぁと百年後に言われますことを恐れて」辞退したと釈明します。

督永議員はこれを受けて、そんなものは「誰が考えても理由にならない」と反駁し、「二月の上旬に朝鮮の人々に彦根市の玄関先に朝鮮人によって寄付されることは、人からとやかく言われるおそれがあると申されておりますが、こういった民族の差別感によって断わられたのではないか」と再質問します。金川教育長は、あくまで「教育委員会の無能ということを永久に残すことになりますので私はお断りした」と繰り返します。続けて督永議員が、市長に相談せず教育委員会の一存でやったのかと問うと、金川教育長はそうだと答えて休憩に入り、この件の議事の記録は終わります。

京都新聞の報道と議事録とではややトーンが異なりますが、おそらくは教育委員会側が差別的な理由で拒絶し、それを後からおかしな理由で取り繕ったというのが真相ではないかと思われます。しかし翌1961年7月に、市長も参席して像の除幕式まで行われます。その間に、さらにどのような顛末があったのか、京都新聞と市議会議事録を追ってみましたが続報はなく、今のところ詳しいことはわかっていません。次回も城東小についてもう少し書きたいと思います。

◆お知らせ①

1月11日まで、「滋賀県史編さん大綱（原案）」へのパブリックコメントが実施されています。詳しくは滋賀県立公文書館ホームページ（https://archives.pref.shiga.jp）を参照してください。「大綱（原案）」自体は漠然としていて、どう意見を出したらいいのか少し戸惑いますが、県史のあり方について県民が直接意見を届けられるよい機会だと思うので、皆さんも治安維持法犠牲者の歴史が正しく刻まれるよう意見を出してみてはいかがでしょうか。私も何か意見を出そうと思います。朝鮮人の関わる歴史について協力する機会があればと思っています。

◆お知らせ②

8月に多くの「不屈」読者にも観に来て頂けたドキュメンタリー映画「金福童」の上映会を、1月29日（日）午後2時からG-NETしが（近江八幡）の視聴覚室で行います。8月に見逃された方は是非。詳しくはこちら。

https://fb.me/e/2KIM8Q5Lx

（3頁より）

ちなみに日露戦争の時代には、歌曲の最も有効な普及媒体は学校教育だったと思いますが、例えば旅順港閉鎖が1904年、それを歌った『廣瀬中佐』が唱歌教材に採用されるのは8年後、また乃木大将の『水師営の会見』も5年かかっています。